第２段階を迎えた NBDC

高木　利久
（科学技術振興機構バイオサイエンスデータベースセンター）

ライフサイエンス分野のデータの共有促進とデータベース(DB)の利便性の向上を目的として平成 23 年 4 月に科学技術振興機構(JST)に設立されたバイオサイエンスデータベースセンター(NBDC)は、第 1 段階と呼ぶ 3 年間の活動期間を終え、本年 4 月より第 2 段階に突入した。第 1 段階、第 2 段階という区切りは、内閣府の総合科学技術会議ライフサイエンスプロジェクトチームから平成 21 年 5 月に出された統合データベースタスクフォース報告書のロードマップによる。

DB という永続的な営みが要求されるものにとっては 3 年間で一区切りというのは短いと言えるが、第 1 段階の 3 年間はデータベース統合やそれに基づく DB サービスのための恒久的な体制を準備、検討するために設けられたものである。この期間中、第 2 段階のあり方について NBDC 運営委員会等で提言がなされ、それを受け、文科省その他の政府の委員会で検討がなされた結果、第 2 段階も NBDC を中核とした体制を継続発展させることで統合データベース事業を推進することとなった。第 2 段階の期限はとくに設けられていないが、ライフサイエンスを取り巻く環境が急激に変化している状況を考えると第 2 段階も数年間を一区切りとして、計画や戦略を練るのが妥当であろうと NBDC としては考えている。

さて、第 1 段階では、それ以前の平成 18 年の秋から始まった文科省統合データベースプロジェクトでの成果のうち、「カタログ」「横断検索」「アーカイブ」については厚労省・農水省・経産省の各協力機関との、また、「統合化技術」「統合 DB 教材」等については第 1 段階以前の統合データベースプロジェクトの中核機関であったライフサイエンス統合データ

ベースセンター(DBCLS)との緊密な連携協力関係のもとに継続発展させるとともに、新たに、国立遺伝学研究所 DDBJ センターとの協力によるヒト由来データの受け入れと制限アクセス公開、RDF 技術による DB 統合化技術の開発とそれによるプロトタイプ DB 構築、ファンディングによる分野別の DB 統合化の推進、などを実現してきた。

第 2 段階においては、これらの活動やサービスをさらに発展させ、さらなる高度化を図ることはもちろんのこと、RDF 技術を基盤として、分野を超えた DB の統合化を実現したいと考えている。また、大規模 NGS データの解析環境や質問応答システムの構築など実験系研究者へのサービス向上に直接つながるような開発にも積極的に取り組みたいと考えている。他にも、統合 DB の活用事例を増やすための努力(例えば、現在も行っている統合データ解析トライアルの充実･改善)やそれらの活用方法を広く普及させるための活動も実施して行きたい。そのために、これまで直接は取り組んでこなかったデータ解析研究にも一歩踏み出したい。

また、これらと並行して、DB 活用人材の育成、JST の情報事業、文献事業との連携によるサービスの向上、公的資金によるデータ産出プロジェクトからのデータ提供の義務化に向けた働きかけ、持続可能な予算確保の仕組みの検討、データや DB の急増にも耐えられる DB の維持管理の省力化、東北メディカルメガバンク等のゲノムコホート事業との連携、いわゆる日本版 NIH の日本医療研究開発機構との協力体制の構築、などにも積極的に取り組みたいと考えている。

トーゴーの日のシンポジウムでは、平成 18 年から始まった文科省統合データベースプロジェクト、NBDC 第 1 段階の活動を総括するとともに、第 2 段階およびその先に向けた戦略や活動計画について紹介する。